

色彩学

BULLETIN OF THE COLOR SCIENCE ASSOCIATION OF JAPAN

VOLUME 2 NUMBER 3 2023



巻頭言 MIC・ICD

理事・MIC・ICD担当 高田 瑠美子 (Color Designer)

MICは“Most Impressive Color”の略称で、一年を代表する『今年の色』を一色に絞ってその理由とともに応募いただく行事です。日本色彩学会創立70周年記念事業の一環として2018年より企画され、現在10月中旬から2か月間募集し、結果を年末にHP上で発表しております。ICDは“International Colour Day”の略称で、AIC(国際色彩学会)が提唱する色彩記念日です。世界各国で様々なイベントが開催されており、日本では2019年より3月の「春分の日」にMIC授賞式も執り行っております。MIC、ICDのいずれも、会員以外の方々にも多数参加いただいております。

2021年度よりMIC・ICD担当理事を拝命し、関係の方々のご協力のお陰で第4回、第5回のMIC・ICDを無事に開催することができました。MIC 2021は187件の応募から「赤」、MIC 2022は231件の応募から「緑」が授賞決定色となりました。MICの応募理由を考慮し、ICD2022では『生活者と色彩』、ICD2023では『平和と色彩』を特別企画の骨子とし、実りあるご講演をいただきました。ICDのご講演内容を参考に2年分の貴重な応募理由を振り返る機会も得ました。

『今年の色』はニュース映像として感情を動かされる出来事に関連して頻繁に目にするものの色や配色、その出来事に対する感情の方向性を示す象徴色がその年の授賞色の傾向となり、その「色」の出来事の数が多いほど、さらに実生活で日常に何らかの影響を及ぼし印象に残る身近なもの「色」が重複するほど該当色の応募数が伸びたと感じております。例えば、2021年

は無観客開催でのオリンピック(東京2020)、大リーグでの大谷選手の活躍など、映像を介して頻繁に目にするユニフォームの「赤」、感動や勇気づけの象徴色としての「赤」、日常生活ではCOVID-19の自粛期間に関連して、緊急事態宣言発令の目安となる点灯色、警戒サイン色などの「赤」を常に気にかけて過ごしました。また、2022年はコロナ禍収束を期待する状況下で戦争や国葬といったニュースが重なり、ウクライナの国旗の色、ゼレンスキー大統領の上衣の色に加え、現地の悲惨な状況を伝える映像には背景として常に遠景の木々の「緑」を視覚情報としてとらえていました。出来事に心が動かされ、そこから多くの人からいただいた感情の方向性は平和を願う象徴として思いに端を発した緑色のイメージと一致しました。日常生活では、エコロジーな観点の高まりも相まって、自然界の「緑」の大切さを実感する年であり、前年度から流行しはじめたグリーン系のアイテムもファッションだけでなく、家電やインテリアなど、より多くの身近なもの色の選択肢として目にする機会が増えました。MICの『今年の色』は未来的な流行色や振り返りの過去の象徴色としてではなく、まさにリアルタイムで社会情勢を反映する流行色として参考になるのではないかと考えております。

MIC 2023・ICD2024も引き続き、色彩学会の行事として継続、定着させるべくより多くの方々に応募・参加していただけるよう尽力いたす所存です。ご支援のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。